GOD EATER　-PL/RAYERS-

阪川ヨシカズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＯＤ　ＥＡＴＥＲ　－ＰＬ／ＲＡＹＥＲＳ－

【Ｎコード】
Ｎ２２７４Ｚ

【作者名】
阪川ヨシカズ

【あらすじ】
それは、神を喰らう者の物語。いや、神を喰らう者『たち』の物語。
フェンリル極東支部、通称：アナグラに、初の新型神機使いが現れる。……『二人』。そして、それに導かれるように新型神機使いはさらに集まる。
予定された時計の針は、徐々に狂い始める。さて、狂っているのは世界か、アラガミか、あるいは、人間か。

そして彼らに待つは、神々の楽園か、奈落の底か。

1. PLAYERS（前書き）

これはフィクション。こんな世界は存在しない。だけど、それは未来のことかもしれないし、遠く遠く宇宙の果てで現在進行形で存在しているのかもしれない。
それにかかわらず、あなたはこの物語を否定することができる。あなたの中の『ゴッドイーター』の世界を、壊されたくなければ。すぐに立ち去ることを勧める。

大丈夫、世界は無限に存在するから。

1. PLAYERS

――――――NOW LOADING・・・

――――［READY・・・］

フェンリル極東支部、通称・アナグラ。旧型神機使いは多くいるが、未だ新型は一人もいない。

・・・だが、ついに適合候補者リストの中に、新型神機に適合するものが現われた。

この出来事は一日とせずにアナグラ内に広がり、話題の大半はそれに関連するものであった。それほど、新型は重要視されているのだ。

「新型が入ってくるけどよ、俺たちの立場はどうなっちまうんだ？」

「焦るなよ。先輩面してりゃいいんだ、俺たちゃ。それにしてもさ、」

新型が一度に二人も入ってくるなんて、珍しいこともあるんだな。

――――――１４３０　適合検査室（兼第三訓練所）

――［睦月ケイスケ］

足が、震える。それとも地面が揺れているのか。そんなことは分かり切っているさ、この足の方がおかしいに決まっているんだ。

あとは、あとはここに、手を置けばいいんだ、手を置く、手を置け。それで終わり。たったそれだけで、すぐに終わる。一瞬で、一瞬で終わる、そうに違いない。

だから、ほら、さぁ。早く終わりにしてしまおう。何のために、親父とお袋を説得してここまで来たっていうんだよっ。ほら、早くっ。

だけど、強張った体はそう簡単に動いてはくれなかった。

そうこう思案していると、スピーカーから声が聞こえた。それは、女性の声。

「どうした？　貴様はゴッドイーターとなるためにここまで来たのだろう？　それなりの覚悟を持ってここまで来たはずだ。――――ならば、この程度のことができなくては困る。これからの任務はもっときついだろうからな。

忠告しておく。覚悟がないのならここからさっさと立ち去れ、そんなちゃちな覚悟でこの仕事をやっていけると思うな！」

その言葉を聞いて、胸が苦しくなった。俺の覚悟って、この程度だったっけ。もしも、このまま帰ったら、帰ってしまったら。――――俺の家族は、どう思うかな。

親父は俺の決断を聞いて、ただ一言、好きにしろって言った。だけどそれだけじゃなくて、その選択に後悔はないか、って訊いてきた。
あの時の俺は、自信を持って縦に首を振ってたけど、今の俺は、どうなんだろう――――。

お袋は、……最後まで反対してた。だから、縦に首を振ってくれるまで、俺は何度も何度も頼んだ。そして、最後の最後にようやく、半ば呆れながらも笑って了承してくれた。

――――そして今からちょうど一週間前に、神機に適合したという報せが家まで届いた。それはもう、俺は手放しで喜んだよ。その時の母さんの顔は、やっぱり呆れていて、それでいて悲しげで。
それから今朝、家を出るときになって、ようやくお袋がまともに話してくれた。いや、話したというよりは、俺に忠告した。

『死に急ぐなんて本当に馬鹿ね。一体誰に似たのかしら、ホントに……。いい？　絶対、死んじゃダメだからね。遺物で戻ってきた日にはあの世まで殴りこみに行ってやるから、覚悟しておきなさいよ』

――――覚悟、か。俺の覚悟は、こんなもので、この程度で、破れる？　一瞬の痛みで、俺の覚悟がぶち破れる？
なんだよ。どうして、この程度で俺の覚悟が打ち砕かれるなんて、思ったんだろうな。本当に馬鹿みたいだ、俺って。

「俺の、覚悟は。…この程度じゃない！」
俺はそう嘲り笑って、右手を機械の上に、差し出した。

その刹那、爆ぜる音と共に、これまでに味わったことのない、能動的苦痛が腕から体中へ駆け回る。その痛みは体中から汗と涙と喘ぐ声となって搾取された。
いっそこのまま、楽にしてくれ。そんな考えを頭の中から追い出す頃には、痛みは最初から存在しなかったかのように鎮まっていた。
――そして、機械の蓋（？）が持ち上がって、俺は腕に輪っかのようなものが嵌まっていることを確認する。そして俺の決意を見届けたかのような声を耳にした。
「決断が遅い。任務中は瞬間的な決断が必要とされる、少しの判断の遅れが命取りだ。――フェンリル極東支部へようこそ、……新型ゴッドイーター」

――――――1441　訓練所エリア廊下

――［睦月ケイスケ］

エントランスへ戻る途中、おそらく俺より年上の奴とすれ違う。そして、すれ違う時に彼は質問した。
「急に訊いてすまないが、何をされたんだ？」
どうやら、彼も神機の適合者のようで、今から腕輪をつけに行くようだった。そして、正直に答えて不安にさせるか誤魔化すか迷った挙句、「全然どころか一切痛くないようなことをされる」と、はいはい冗談ですけど何か？　みたいな感じで答えた。
「そうか、それならよかった。感謝する」
そう言って彼は行ってしまう。――思えば、これが俺とあいつ

の初対面だった。

――――――１４４２　エントランス

――――［睦月ケイスケ］

少し迷いながらもエントランスに到着する。アナグラの中は想像よりも遥かに広かった。
さて、指示が出るまで待っていればよかったんだっけ。ソファーにでも座っていようか。

――――っと、既に座っている人がいた。とりあえずその横に座ることにする。見る感じ、同年代のようだ。服は、ああ、居住区で今流行の服だったような。

「ガム食べる？」
「えっ？」
唐突に尋ねられ、少し焦ってしまった。
「えっと、ガム？　ガムね？　えっと、貰えるものなら貰っておきたいな」
俺がそう答えると、彼はポケットをゴソゴソとするが、…どうやら今食べているので最後だったようだ。それを聞いて俺の口から少し溜め息が漏れる。

「それで、誰だ？」
俺はまず聞くべきだった質問をいまさら口にする。さすがに一言目から「誰だ？」は失礼な気がしないこともないが。
「え？　あぁ、俺はコウタ。藤木コウタ。少しばかりだけど俺の方

が早かったから先輩ってことで」
「それは認めない」
これでも競争心は人一倍なもので。意固地って言われても仕方ないよなぁ。
「それじゃあ、俺も自己紹介しなきゃな。俺は睦月ケイスケ、ぴちぴちの15歳だぜ」
「あ、じゃあ同い年ってわけか、お互いよろしくな」
それを聞いて、少し安堵する。正直、俺よりも年上の奴ばっかりだと思ってたからな。ところで、いつになったら指示が来るんだろうな。
「上官の人が来て説明してくれるらしいけど『うぎぃやあぁあぃひぃいいイィイィアァァァアあアッ……イィイイヴゥウうぅあああああっ……！！！』

彼の言葉をさえぎって、突然、施設内に悲鳴が木霊する。受付やらあちこちやらからざわざわと声が上がったが、
「な、なな、なんだよ、今のっ……」
はっしとコウタは俺の手を握る。
「おい、手ぇ握るな、痛い、痛いって！！」
あ、あれ、椅子が揺れてる？　なわけないか、揺れてるのは俺だよっ。
「確か、腕輪を今つけてる奴いたよな、そ、そいつがほ、捕喰されてっ、」
こ、ここは落ち着いてひひ否定しようぜ、お、俺っ。
「だ、大丈夫だと、おもも、おも、思ふうっ…」
――――そして、騒がしかったエントランスに静寂が訪れる。だ、誰か何とか言ってくれよ、怖いって。

と、エレベーターから一人の女性が出てきた。……第一印象。でかい。どこかは言わない。第二印象。怖い。取って喰われそう。
そして彼女は、俺たちの前で仁王立ちになる。そして、凛とした声で言った。
「立て」

……一瞬意味がわからなかったが、立つように命令されているのだと理解し、俺たちは立つ。さながら受刑者のようで、違和感を拭えない。———ところで、この声はどこかで聞いたような気がする。
「私がお前らの上官を務める、雨宮ツバキだ。……先ほどの声の原因は黙らせておいたからもう問題はないだろう」
あの人沈黙させられたんだ。なんか良心が痛むなぁ。そうこう思いながらあくびをすると、ツバキさんが俺をたしなめる。
「睦月。何を考えているかは知らんが、上官の目の前であくびなどは控えろ。二度目は蹴り飛ばすぞ？」
「あ、あっ、すみません」
そうだ、ツバキさん、だっけ。この人は俺に帰れって言ったやつだ。思ったとおりやっぱり怖いな……。

「メディカルチェックはサカキ博士の研究室で行われる。睦月は１５００から、藤木は１６３０から。無論、時間厳守だ。……遅れるような真似をしたら、少々手荒な事をするぞ」
うわぁ、絶対に遅れない。というか遅れられない。遅れたらたぶん命はない。
「分かったなら返事をしろっ！」
「「は、はいィっ！！」」

二人の声が初めてそろう。———ツバキさんがエレベーターに乗ってエントランスを去るまで、俺たちは気をつけの姿勢でいた。

――――――１４５５　研究室

――［睦月ケイスケ］

ここで合ってるか、不安になりながらも室内に入る。室内には、椅子に座る初老の男性と、よくＣＭで見かけるここアナグラの宣伝部ちょ――――もとい、支部長。

初老の男性は、ただただ俺には理解できそうにない機械をいじっていて、こちらに気づいている様子はなかった。

「サカキ博士。……サカキ博士」

せんで――――、支部長に二度呼ばれて、ようやく応える。

「なんだいヨハン、今は――――おっと、もう来ていたのかい。予想よりも２６３秒も早い」

それって要するに制限時間ぴったりじゃないか？　俺はそこまでルーズじゃありませんっ。

……とは言ったものの、ツバキさんに言われなかったら多分そうしてたと思う。

「それで、めでぃかるちぇっくって何をするんですか？　まさか、注射とかするんですか？　他にも注射とか、あと採血とか接種とか点滴とか注射とかするんですよねッ？！」

注射は大っ嫌いだ！　ここでサカキ博士がかぶりを振ってくれなかったら本気で泣いてたと思う。

「……まずは、自己紹介としようか。私はペイラー・サカキ。ここ

フェンリル極東支部で技術屋、もといアラガミ技術開発統括責任者を務めている」
え？　アラガミ・・・ん？　統括技術？　あれれ？
「なんですその早口言葉みたいな……。俺には縁がなさそうですけどね」

サカキ博士は、先に用事を済ませたらどうかと、せんで――、支部長に促す。
「サカキ博士が自己紹介をしたから、便宜上だが私もすることにしよう。名前は知っているな？」
「えっと、……ヨハネスぅ、……えっと、よはねす、ふぉん、――宣伝部長？」
あっ、眼光が鋭くなった。もしかしてこれ地雷っぽい？　地雷だよな？
「……では親切に教えてやろう。私はヨハネス・フォン・シックザール。ここフェンリル極東支部の支部長を務めている。――今後は、間違えても“宣伝部長”と呼ばないように心得ておくように頼む」
へいへい、そうでありんすか、はぁ。またややこしい名前付けて、親の顔を見てみたいものだ。……調子のってスミマセン。

「さて、本題に移らせてもらおうか。……博士、これまでも重ね重ね言ってきたが、説明中に邪魔はしないように」
ピンポイントに釘を刺した。抜け目がないというか準備周到というか。
「まず、初めに確認しておくが、ゴッドイーターはどのような事をするか、知っているか？」
「ええ、それぐらい知ってますって。アラガミをちぎっては投げちぎっては投げ、瀕死になったらホールドトラップで足止めして捕獲

用麻酔だ、」
「どうやら一から説明する必要があるようだな」
あれ、違ったの？　いや合ってるでしょ、ゴッドイーターってそういう職業じゃなかったっけ。
「主な仕事はアラガミのコアの回収及びアラガミの討伐だ。コアはエイジス計画を推進するために使わせてもらう」

———エイジス計画。太平洋上に、周囲をアラガミ防壁で覆われた人工島・エイジスを建設し、生き残った人々を移住させるという計画。テレビで何度かエイジスを見たことはあったが、建設は最終段階に差し掛かっているように思われる。だけど、これだけは、これだけは聞いておきたかった。
「この計画が完成すれば、……みんな、みんな、助かるんですよね。俺の家族も、友達も」
その答えさえ得られれば、きっと心置きなく頑張れるはずなんだ。答えのない戦争ほど、馬鹿馬鹿しくて愚かなものはない。
「———そのためには精進することだ。私からは以上だ、これで失礼する」
そう言葉を濁して、せん———、支部長は退室しようとした。

「ヨハン、ちょっと待ってくれないか？」
不意に博士が呼び止め、せん支部長は少し呆れ気味で応える。
「博士、そろそろ公私の区別をつけては、」
「彼は、この支部の新型神機使いで、まだ若いから。大切にしてほしい。……君一人のものじゃあ、ないからね」
そう言って、意味深に博士は笑った。宣伝部長も、笑った。———でも、目は笑っていなかった。

そして彼が退室するまで、俺は放置されっぱなしだった。

「よし、準備完了だ。それにしても、データを見る限り、君の潜在能力は私の想像をはるかに超えているようだ。ここまでとは思わなかったよ。……それじゃあ、そこに横になって、リラックスして。三時間後に目が覚めたら、そこは君の部屋のベッドの上だ。それじゃあ、始めようか」

言われたとおりにする。まず、シールつきの電極のようなものを体のあちこちに貼られる。なんだか少しこそばゆい。心電図が揺れるのがここから確認できるけど、いつもより早いのは、きっと緊張しているせいだ。

次に、酸素吸入の機械のようなものが顔に当てられる。そして、ゆっくりと呼吸をしてくれと博士に言われた。

……すると、急にうつらうつらとしてきて、

……博士の声が聞きとれなくなってきて、

……それが麻酔だと気づいたころには、

……電球が突然切れたかのように、目の前が真っ暗になった。

――――――２００２　自室

――――［睦月ケイスケ］

目は開いたけど、まだ目が覚めきらなかった。頭が冴えないとい

うか、まだぼーっとしてる感じがする。できればもう三十分、たった三十分でいいから寝ていたい。そんな調子で、目が覚めてから既に二時間が経過していた。さすがに、これ以上の睡眠は無粋だな。

それにしても、今さっきから断続的に響くくぐもった音はなんだ？　空っぽのドラム缶を打ち鳴らすような音が、ドンドン、ドンドンと響いている。……部屋の天井が鮮明に見えてきたとき、それがドアを叩く音だと気付いた。

「あ、あっ、はいはい、いまドアのロック外すから」

少し焦りながらドアのロックを解除する。そしてドアが開くと、いきなり鉄拳が飛び込んできて、俺は咄嗟にかわした。不意打ちかよ、きたねぇ奴だなぁ、おい。

「……貴様のことは、絶対に許さんぞ」

ただ一言が許されるのならば、全く理解不能と言うだろう。それほど彼の襲来は突然で、俺は彼のことを全く知らなかったのだから。

「おいおい、いきなり襲ってきて名前も言わないってのはないだろ。まずは名乗ってからにしろよな」

俺の言葉に少し頭に来たようで、顔面目掛けて拳を振るった。怒りに任せた拳は、あまりにも避けやすい。静かな怒り、そっちの方が怖い。なんでかって言われたら、その、……お袋かな。うん。

「お前は俺の何が気に食わないってんだ？　というか先に名前を言ってからにしろ」

それを言ってくれなければ話は進まない。そして彼は質問に答えない。

「理由は分かるな？　簡単なことだ。貴様は俺に、恥をかかせた。何だか分かるな？」

「いや、だからさ、理由より先に名乗れよ」

すると、少し目線をそらして、……自分の名前が恥ずかしいのかは知らないが、小声で言った。

「――榊レキ、……17だ」
榊？　博士と関係があるのかな。と、苗字の方はどうでもいい。
問題は、
「レキぃ？　またまた女っぽい名前だなぁ。やっぱり漢字で書くとつ――」
「コヨミと書いてレキだ。そっちじゃない」
そっちってどっちだよ、おい。俺も一体何を言いたかったのやら。

「あ、その顔はどこかで確認した覚えがある。記憶領域の中から現在探索中っと。えーとぉ、確かー、……ああ、絶叫した奴。そうかそうか。……んで、俺に逆ギレですか、そうですか」
「違うっ！　貴様が痛くないと言ったから楽ーーーーに構えてたらこのザマだ！」
真面目だったのか、完全に俺の冗談が通用してなかったんだ、正直者というかバカ正直というか、それともただの馬鹿というか。……だけど、そんな彼の気持ちも察せず、軽い気持ちで答えたのは、俺だ。
「俺があんなこと言わなきゃよかったんだな、……悪かった」

俺が頭を下げると、俺があっさり謝罪したことに少しばかり呆気にとられているようだ。そんな様子をコウタは見た。
「あ、もう一人入ってきた奴いたんだ。ということはまさかこの人が叫ん、」
「おい、貴様。本気で殴るぞ、もうずいぶん噂になってるじゃないか」
「そりゃぁあんたがあれだけ大きな声で叫んだんだもの、エントランス突き抜けてラボラトリまで聞こえたそうだよ」

ふと、レキは俺に向き直る。
「おい、そっちの名前はなんだ？」

そっちと言われ、一瞬誰のことかわからなかったが、この場には俺とこいつとコウタしかいないのでコウタのことだと判別した。
「あぁ、俺？　俺は藤木コウタ」
「よし、コウタ。こいつの体しっかり押さえてろ。大丈夫だ、すぐ終わる」

むんずっとコウタは俺の体をつかみ、しっかりと羽交い絞めにする。そして、レキは関節を鳴ら（そうとするが鳴らないので、鳴らすフリを）して不敵な笑みを浮かべる。くう、コウタ、俺を裏切ったな！！
「何が何だか分からないけど、こうした方がいいような気がするんだよ」
「これ一発でチャラにしてやる。貴様の名前はなんだ？」
「え、えっ、……む、睦月、ケイス」

ケを言う前に彼の鉄拳が人中に食い込んだ。そして脳内が揺れて揺れてそのまま気を失った。

――――――――２０１８　ケイスケの部屋

――――［榊レキ］

「その……すまん。本気でやりすぎた」
「ふぁははひんひゅうひはいふほわほおああはっは（まさか人中に入るとは思わなかった）」

別に狙ったわけじゃないのだが、ケイスケが暴れたことと、コウ

タがあまりしっかりと押さえられなかったことで位置がずれてしまったのだ。正確には眉間の少し上あたりを狙ったのだが。ちなみに、人中とは口と鼻の間である。あそこに入ると酷く痛い。

「全く、すごい音がしたかと思ったら。もうこういうことはしないでよ！」

小競り合いの後駆けつけた彼女が、彼を介抱してくれた。どうやら衛生兵のようだが。髪はセミロングで、それを髪飾りでまとめているようだった。

「……それよりも、わざとらしい。本当はもうまともに話せるんだろう？」

「ちぇっ、バレてたか」

バレバレだ。そして、彼が立ち上がると同時に、腹がなった。コウタはそれがおかしかったようで笑い出す。

「確か、配給のチケットでいろいろ引き換えてもらったっけ。レキが代わりに引き換えに行ってあげたってさ。ほら、冷蔵庫の中身見てみなよ」

一応、俺ができる償いといえば、これぐらいである。しかし、彼がこの程度で許してくれるか。

彼は冷蔵庫を開けると、冷気とともに、ささやかな配給品が入っているのを確認する。まず基本的な野菜。でかいトウモロコシに少し驚いた。あと、レトルト食品や、チューブ状のゼリーっぽいドリンク。そして炭酸や野菜などのジュース。

「よし、俺が引き換えてやったんだから正当な労働賃金としてジュース一本貰い」

「誰がやるかよ！」

俺なりの冗談のつもりだったのだが、真に受けられた。俺が言ったら冗談に聞こえないのか、そもそも冗談ってどんなものだろうか……？

「とりあえず、俺は自室でゆっくりディナーとしよう。これでも料理は得意だからな」
「あぁはいはい、お疲れ様でございました」
小馬鹿にされながらも、俺は部屋を出る。そして腹は、空腹のサインを放った。

――――――２０４２　エントランス

――――［睦月ケイスケ］

ツバキさんに俺たちは呼ばれたが、一体何があるというのだろうか？

「よっ、お前らが新入りか」
突然声がかかって、弱虫の俺はビクッと震える。そして、落ち着いて声がする方向を見ると、一人の男が立っていた。
「え、えぇ、はいはい。俺らが新入りですよう」
とりあえず俺は深呼吸をしながら応えることにする。すると彼は、ポケットからタバコを取り出してくわえる。そしてライターの火を、

「リンドウさん、エントランスは禁煙です」

――――受付の女性に咎められ、渋々タバコをしまう。

「それで、どなたですか。……腕輪を見る限りは、神機使いのようですが」

レキが彼に質問したら、彼は口元に笑みを浮かべて答えた。
「ああ、そうだ。お前らは多分あねう――雨宮上官に呼ばれているんだろう？」
あれ、いま姉上って言おうとしたよな、それってもしかして。
「よし、時間には間に合ったようだな――と、リンドウ。こいつらにちょっかいを出したりはしていないな？」
「いぃえいぃえ。それでは、俺は少しデートに……」

そう言い残して彼はそそくさとエントランスを抜け出す。間違いない。あの男、ツバキさんの弟だな。
「さて、では訓練に行く。主に神機の操作、特に新型は銃形態と剣形態の変形操作について理解しろ。これができなければ、一生ミッションには出られんぞ？」
そ、そんなのはごめんだ。しっかり頑張らないとな、何のためにこの職業に就いたんだ、俺！

そして俺たちは、訓練所へと足を運ぶ。訓練所はたくさんあるようで、今から俺たちが行くのは、第二訓練所。
一体何をするかドキドキしてきた。このドキドキは不安なのか、それとも期待なのか。そんなことは分かるわけがないが、俺たちは戦場への一歩を確かに踏み出していた。

――――――２０１１　第二訓練所

――――［睦月ケイスケ］

「よし、そこまで」
ツバキさんの声がかかり、俺は足を止める。……神機はこんなに

も軽々しいのに、膝が笑っている。体力には自信がある方なんだけどな。
「最初は神機に慣れていないから大抵そうなる。じきに治まるだろう」
……とりあえず、一通りの動作を学ぶことができた。通常は一人ずつの訓練らしいのだが、やはり三人まとめて入隊されたのが面倒だったらしく、一度に行ったそうだ。そして、ようやく終了の時間となったので今日はひとまずこれで解散だそうだ。
ちなみにレキ（あとで年上だからさん付けにしろと言われた。殴っておいてそれはないから呼び捨てにさせてもらう）と俺は、同じメニューをこなしたが、コウタはまた別のメニューだったようだ。旧型と新型の違いってのはこういうところで現れるわけか。
「明日の朝はくれぐれも、遅れないように。少しでも遅れたら休憩はなし、予定の時間の二倍は動いてもらうことになるから、覚悟しておけ」
そう言われたら絶対寝坊する気なくなる。早く休みます、ばっちり寝て早起きします。
「ふぅ、やっと終わったか。あー、疲れたな」
レキとコウタは地面に仰向けになっている。俺はそこまで疲れてはいない――――わけではない。だがへばったら負けのような気がするのでそういうことはしない。
「んじゃあ俺はジュース買ってくるから、コウタも欲しかったらついでに買ってきてやるよ」
「おい、俺は」
コウタの分だけ聞いて訓練所をいったん飛び出した。後ろからばかやろーって声がかかったけど気にしない、あーあー、聞こえないの言葉ー。

自動販売機の前に到着。さて、コインを投入――あれ？
「こ、これどうやって使うんだよ、おい。硬貨投入口どこだ？　居住区に合ったやつと違うぞ？」
これは参った。さすがに手ぶらで帰るのも悪いし、うーむ、どうすれば買えるんだ……？

「ああ、お前がうわさの新人か。こんなところで何やってるんだ？」
「え？　あ、え、えっ…と……」

――――――２０１３　第二訓練所

――［榊レキ］

「ったく、俺の分はないってのは冷たい奴だな」
俺は溜め息をついて、そう愚痴る。
「そりゃあ恨みでしょ。痛そうだったし、あれ」
言い返せない。確かにあれは俺が悪かった。もっと謝っておくべきだったか。

「ところで、聞きたいことがあるのだが。……なぜゴッドイーターになったんだ？」
俺はなぜかそんな質問をしてしまう。やっぱり疲れているみたいだな、今の俺は。
「なんで……って。かーちゃんと、ノゾミ――ああ、妹のことだけどさ――ノゾミたちをさ、守りたいんだ。……俺が守ってやらないと、二人を笑顔にしてやれないからさあ」

――強い奴だ。俺よりも年下のくせに、信念を持っていて、……とても妬ましくて、自分がとても、
「……情けないな、……俺は……」
自分に向かって、そう呟いた。俺は、……逃げた。全てを投げ出して、目を背けた。だけど、仕方ないんだ。仕方なかったんだ。……耐えられなかったんだ……。

「じゃあさ、レキはどうなんだよ。何か目的があってなったんだろ？」
コウタの問いに俺は答えられない。だから俺はサッと立ち上がり、神機を持って黙って退室しようとする。
「……おい？　そっちが先に質問したんだから答えてよ」
「――すまない。……今の俺には、――答えられないんだ」
俺はそう言って逃げるように部屋を去った。

――――――2015　訓練所エリア廊下

――［睦月ケイスケ］

「ほら、こうやったら出るぞ」
そう言って彼は腕輪を電子部分に当てる。するとガコン、という音とともに、コーラが2本出てきた。
「支払いは腕輪でできるんだ。――そういうの一切聞いてなかったからなぁ、ははっ。てっきり現金かと」
俺は苦笑しながらそう呟く。
「ほい、コーラ2本でいいんだろ？」
彼は缶を渡すと、その場から去ろうとする。

「あ、えっと、代金は？」
「そいつは奢りだ、入隊祝い。いつか同じ任務に出られるといいな！」
笑って、彼は立ち去って行った。……入隊祝いなら、悪い気はしない。

「大森、タツミさんか。――――いい人だったな」
俺も、彼のような人と任務に出たいと思った。

これ以上コウタを待たせるのは悪いので、さっさと戻ろうか――――と。……ん？
「あれ？　レキ？」
「――――――」

レキは、何も言わずにすれ違う。ということはもうすぐコウタも来るかもしれないな。
……だけど、彼の顔は、あまりいい表情には見えなかった。どうしたんだろうな、一体。

「あ、いたいた。何してたんだよ、すぐに買ってくるかと思ったのに」
と、コウタが走ってきて話しかける。
「いやぁ、買い方が分からなかったんだよ、ほら、居住区のと違うだろ」
俺はとりあえず弁解して、すぐに分かってもらえた。コウタはしっかり聞いていたようだ。意外だな。

「ところでどうしたんだ、レキの奴？　あんまりいい雰囲気じゃなかったみたいだけどよ」
「いきなりさ、なんで入隊したのかって質問して、答えた後にレキ

はどうなんだって訊き返したら、あんな様子になっちゃって」
「要するに地雷踏んだってことだな。そのうち機嫌も直るだろ、ほっとけばいいさ、ほっとけば」
コウタは、「そうかな？」という顔をしたが、勝手に納得したようで、俺から受け取ったコーラのプルタブを上げて飲み始めた。俺も倣ってプルタブを上げ、揺らしすぎた炭酸飲料の洗礼を顔に受ける。

「うわっぷ」

――――――0629　第二訓練所

――［榊レキ］

「時間には間に合ったみたいだな――――おい、起きてるのか、お前ら」
立ったまま寝息を立てる二人。こいつら、どこでも眠れるのか？
「気をつけろ。ツバキ上官が爆弾を持ってきたぞ」
ビクッと二人は震えあがり、目を覚ます。ちなみに言っておくと、爆弾ではなくスタングレネードである。

「これの名称は分かるな、睦月」
「えっと、……閃光玉？」
馬鹿か。それとも寝ぼけているのか？
「スタングレネードだ。覚えておくようにな」
ツバキさんは直視しない方がいいと言ってピンを抜き、地面に叩きつける。すると、閃光がほとばしり、爆音が鳴り響く。目をつぶったが、目の前が白んだし、耳がじりじりとなって痛くなった。

「こいつはアラガミにも通用する。使い方は簡単だ。ピンを抜いて、地面に叩きつける。お前らにもできるだろう？」
「無論だな」
俺はスタングレネードを受け取ると、ツバキさんがやったようにピンを抜いて叩きつける。

「うおっ、眩しいっ！」
少し目の前がチカチカしてしまう。閃光と音が収まると、コウタも一つ受けとった。
「じゃあピンを抜いてっと。えい！」
ワンバウンドして、時間差で閃光を発した。どうやら力が少し足りなかったようだ。これではアラガミに隙を与えてしまう。

「それじゃあ俺も一つもーらいっと」
ケイスケは、ツバキさんからはっしとスタングレネードを取って、ピンを抜いた。
「てぇい！　……あれ」

思いっきり地面に叩きつけたように見えたが、不思議と反応がない。不発のようだな。
「なんだよぉ、俺がやった時だけこれってありか？」
そう言ってケイスケは不発弾を拾い上げようとする。おいよせっ、こいつ、寝ぼけてるのか？！
「ば、馬鹿っ、よ、よせ！」
ツバキ上官が制止しようとするも、彼は聞かない。
「大丈夫ですって、ツバキさん、これぐらいどうってこと、」

案の定、マグネシウムはその一瞬で反応を連鎖させ、辺りが真っ白になる。俺たちは咄嗟に目をつぶったが、ケイスケは間に合わな

かったようで、閃光の直撃を喰らった。
そして再び確認すれば、果たして彼は倒れていた。
「お、おい、ケイスケ！　大丈夫かよッ？！」
「睦月！　しっかりしろ、睦月！！」
――どうやら、完全に失神しているようなので、俺とコウタで病室まで運ぶことになった。面倒な真似を……。

――――――０６５２　病室

――［睦月ケイスケ］

「――――ん？」
今さっきまで訓練所にいたはずだが……おかしいなぁ。なんで俺、寝てたんだ？　しかもここって病室じゃねえか。

「あぁ……、……そっか」
寝る前のことを思い出す。確か、不発のスタングレネードを拾おうとしたら、目の前で暴発して、そのまま昏倒してしまったんだったっけ。

「んあ、ツバキさん」
気づいたら横にツバキさんが立っていた。オーラが出てる。キレてるよ、絶対キレてるよこの人。

……そして、とりあえず彼女は一呼吸おいて言った。
「普通の奴はあんなことはしない。どうしてあんなことをした？私には理解できない」

「いや、あれはその、……知らなくて……」
「知らないじゃ済まされないこともある。だが、私が怒っているのはそういうことじゃない。……私の忠告を軽んじたことだ」
「っ、……それはっ……」

要するに、ツバキさんは俺が失敗をしたことを怒っているのではなく、それを防ぐための忠告を聞き流してしまったことに怒っているのだろう。……甘く、見過ぎていた。

……俺が何も言えないでいると、ツバキさんは溜め息をついて、俺にとって最も恐ろしい言葉を口にする。

「向いてないのかもしれないな、ゴッドイーターに」

心が抉られた。この感覚を、知っている。入隊した時の、あの躊躇いのとき。……でも、その時とは比べ物にならないくらい、心が痛くなった。

子どものころからずっと、ゴッドイーターにあこがれていた。でも、親にはなかなか言い出せなくて。そして、初めてなりたいと言ったとき、両親そろって向いていないと言った。
あのころのデジャヴ。嘘だ。嘘だ嘘だ。俺は、強くなったんだ。たぶん、いや、きっと強くなれる自信があるんだ。それを否定されて、俺は……俺は。

「そ、そんな、違いますって！　確かに俺、非常識なところとかたくさんありますし、もっとたくさん迷惑かけるかもしれません！それに、それにっ――――俺、ただの馬鹿ですし！」

吹っ切れてしまう。もはやどうしようもない領域、自分で自分が嫌になる。だから、それを聞いて、ツバキさんが少したじろいだように見えた。

「馬鹿だけど、精一杯がんばりますよ！　みんなの邪魔にならないように戦って、誰ひとり傷つけさせない！　あいつらだって、親父も、お袋もっ！　たとえ俺がゴッドイーターに向いていようとなかろうと、俺は絶対に、強くなるっ！！」

こうなったらもうヤケだ。やけくそだ。それはきっと、あのときずいぶん時間をかけなければ得ることが叶わなかった、覚悟に違いない。なんで今になってこんなにすんなりと出てくるのだろう？

――そして、そのわけを自分で言いながら理解する。俺がただの、馬鹿だからである。馬鹿の俺が、追い詰められた末に見つけ出した、一つの決意。

そんな俺の熱弁を聞いて、ツバキさんは含み笑いをした。おかしかったのだろうな。笑いたいやつは笑えよ、これが馬鹿の俺の全身全霊の覚悟の表現だ。

「いや、……本当に、若いころのリンドウにそっくりだと思ってな。確かに、向いている、向いていないじゃない。強くなる奴は強くなるし、変われない奴は、いつまでも変われない。……変われない奴がなぜ変われないか、分かるか？」

俺は考えるが、……やっぱりよく分からない。すると、ツバキさんは答えた。

「――変われない奴は、変わろうとしないからだ。変わりたいと思わないから、変わることができない。だから、強くなりたいと思う奴は、絶対に強くなる。それが心からならば。

貴様のような奴は、大抵私がそう言ったらもう少し気の利いたことを言うのだが、それ以上の答えだな、これは。素晴らしいゴッドイーターになれると信じているぞ。……睦月」

「――――は、はい！」

なんだか心が温かくなったような気分。ツバキさんが、こんな人だとは思いもしなかった。……なるほど、だからこそ俺は、ここ極東支部のゴッドイーターにあこがれたんだ。

「さて、しっかり休んだのならば、いよいよ本番だ。初めての任務だ。……いいな？　時間に遅れたらそれ相応の罰は受けてもらう」

やっぱりいつもどおりのツバキさん。でも、それがいい。

だから、自信を持って返事をする。本当は、もう一度ベッドに潜り込みたくなるほど怖いのにな。――――でも、覚悟と決意を言ったからには俺は、守るために、強くならなくちゃならない。

「……はぁあああ、……ふぅうううぅ。――――――――よしッ！」

ゆっくりと深呼吸。そして俺はベッドを飛び出す。

そして病室を飛び出して、……廊下で足を滑らせて思いっきり転んだ。万事オーケー。

1．　PLAYERS（後書き）

やっちゃった。やらかしてしまった。・・・処女作にして、歴史がグレーになっていく。

いやいや、こんな調子じゃだめだ。読んでくれている人がいるならば、頑張らないと！　というわけではじめましてこんにちは。

今回のコンセプトは、『主人公がたくさんいたら？』ですね。無論、本編では一人で、こんなにおしゃべりじゃあありません。だからって黙らせておくのはかわいそうでしょう？　いや、この理屈はおかしいか。

まだ一話目なのに、こんなに飛ばしちゃっていいかなあと思う。とりあえずアリサは出そう（笑）

それでは、また次回まで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2274z/

GOD EATER　-PL/RAYERS-

2011年12月8日01時48分発行